

平成26年度病虫害発生予報第3号

平成26年5月14日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病(葉いもち) 縞葉枯病(ヒメトビウンカ) ニカメイガ	平年並 やや遅い やや遅い	平年並 やや多い やや少ない
		イネミズゾウムシ	平年並(中~平坦地) 遅い(山間地)	やや少ない
果樹	ナシ	黒斑病 黒星病 クワコナカイガラムシ ハダニ類 アブラムシ類	平年並 平年並 やや遅い 平年並 平年並	やや多い やや多い やや多い 平年並 平年並
	果樹共通	カメムシ類	平年並	やや多い
野菜	スイカ	菌核病 つる枯病 うどんこ病	平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並
	スイカ、メロン	アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並	やや多い 平年並
	シバ	葉腐病(ラージパッチ)	平年並	平年並

気象予報(抜粋)

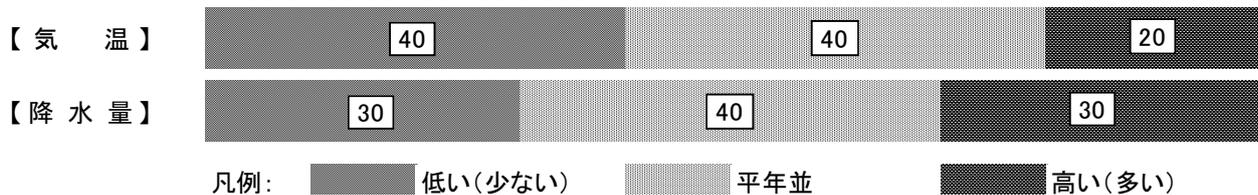
1か月予報(5月10日~6月9日:5月8日、広島地方气象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

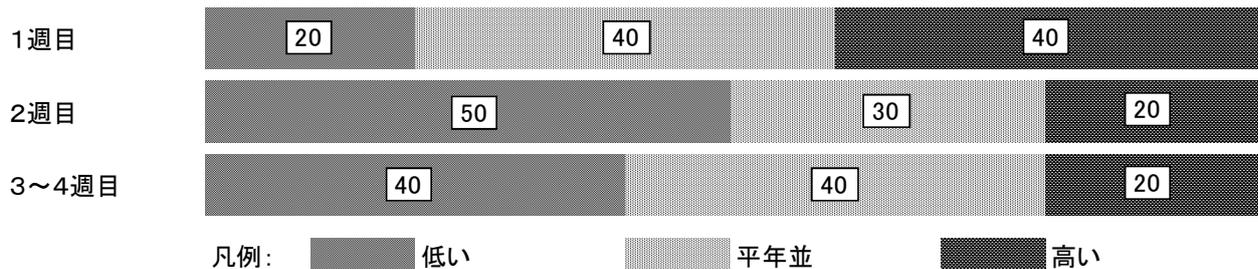
天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 前年の穂いもちの発生は平年並であったため、種子の保菌率は平年並と見込まれる。

イ 4月下旬～5月上旬の気象条件、向こう1か月の気象予報から、苗いもちの発生は平年並と見込まれ、発生量、発生時期ともに平年並と見込まれる。

（3）防除上注意すべき事項

ア 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。使用薬剤については、病害虫防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

ウ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回りなどを行い早期発見に努める。

エ 補植用置き苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。

オ 平成25年に県内の一部地域でストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の発生が確認されている。ストロビルリン系薬剤を使用したほ場では、いもち病の発生状況に十分注意し、防除効果の低下が疑われる場合は、速やかに病害虫防除所または関係指導機関に連絡する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 やや遅い
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカの発生時期は平年よりやや遅いと見込まれる。

イ 前年の本病および、ヒメトビウンカの発生は多かった。

ウ 本種に有効な育苗箱施用剤が広域で普及している。

（3）防除上注意すべき事項

病害虫防除指針等を参考にして、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

3 ニカメイガ

（1）予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 やや遅い
発生量 やや少ない

（2）予報の根拠

ア これまでの気温の推移、及び向こう1か月の気象予報から、本虫の発生時期はやや遅いと見込まれる。

イ 前年の第2世代幼虫の発生量は少なかったため、本種の越冬量は少ないもの

と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

常発地では、病害虫防除指針等を参考にして、本種に対して効果の高い育苗箱施用剤を使用する。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並（中～平坦地） 遅い（山間地）
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 5月12日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。
- イ 5月13日現在、越冬世代成虫の飛翔活動に必要な有効積算温量から推測された水田進入開始期は、中～平坦地では5月9日（平年：5月7日）で平年並、山間地では5月27日（平年：5月21日）で、平年より遅い。
- ウ 前年の第1世代成虫の発生量はやや少なかった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。使用薬剤については病害虫防除指針等を参考にする。
- イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、病害虫防除指針等を参考にして、追加防除を行う。
- ウ 直播栽培などの育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、病害虫防除指針等を参考にして、粒剤などで防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場における開花期以降の孢子飛散数は平年を上回っている。
- イ 4月下旬～5月上旬に行った県内10園の巡回調査によると、幼果のポリ袋検定法による発病果率は1.3%（平年：1.6%）と平年並であった。
- ウ ナシ園における越冬菌密度調査の結果によると、短果枝の病芽率は平年と比べてやや低く、一年枝上の枝病斑数はほぼ平年並であった。病枝率は、調査園全体の平均値は平年と比べてやや低かったが、一部で病枝率の高い園が認められた。
- エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は孢子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。
- イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1，500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍とポ

リオキシリンAL水和剤1，500倍の混用液、ポリベリン水和剤1，500倍液など、小袋掛け終了後には有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、一部で葉や幼果の発病が多い園が認められている。
イ ナシ園における越冬病芽調査の結果によると、腋花芽の病芽率はほぼ平年並であった。
ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。
イ 薬剤は、ユニックス顆粒水和剤47の2，000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1，500倍液、ファンタジスタ顆粒水和剤4，000倍液などを散布する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 前年度、本害虫による果実被害はやや多かった。
イ 越冬卵のふ化開始は、平年より3日遅い5月6日（平年：5月3日）に認められた。
ウ 今後の気象経過などから、ふ化最盛期は平年よりやや遅い5月11日前後（平年：5月9日）と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 前年、被害の多かった園や多発園では5～7日間隔で、次の時期に2回の防除を行う。
- ・ 幼虫ふ化最盛期 5月11～15日
 - ・ 幼虫ふ化終期 5月16～20日
- 少発園では5月15日前後に1回防除を行う。
- イ 薬剤はスプラサイド水和剤1，500倍液又はアプロード水和剤1，000倍液などを使用する。
- ウ 越冬世代は、第1世代及び第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。
- エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口及び粗皮下などにも薬液が十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、ほぼ平年並の4月24～25日（平

年：4月26日）と見込まれる。

イ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並となっている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生が多い園では、カネマイトフロアブル1，500倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第2半旬現在、県予察ほ場におけるユキヤナギアブラムシの寄生新梢率は1.2%（平年：2.5%）で、発生時期、発生量ともにほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期は平年並の5月下旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5，000倍液またはウララDF4，000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、予察灯におけるカメムシ類の誘殺数はほぼ平年並である。

イ 一部の果樹園ではカメムシ類の寄生が確認されている。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生時期は、ほぼ平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の発生が認められるナシ園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤）2，000倍液などを散布する。

イ ナシ以外の樹種における散布薬剤は、各地域の防除暦等を参考にする。

野菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。

イ 本病はやや低温（15～20℃）で、降雨が続くと発生が多くなる。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って除去する。
- イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、カンタスドライフロアブル1,500倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ 曇雨天が続く場合は、ハウスではスミレックスくん煙顆粒6g/100m³（床面積50m²×高さ2m）、ロブラールくん煙剤100g/300～400m³（高さ2m、床面積150～200m²）などを使用する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。トンネル栽培のスイカでは、茎葉に雨がなるべくあたらないようにトンネルを開閉する。
- イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。
- ウ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブル又はジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール10001,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。
- イ 本病は、25℃前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。
- イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ すでに発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。
- エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量は平年並である。また、現地調査ほ場（ハウス栽培スイカ）において、アブラムシ類の発生はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

アハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果後にウララDF 2, 000倍液などを散布し、その後発生した場合にはアドマイヤー水和剤 2, 000倍液などを散布する。

ウスイカのトンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤 5, 000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤 4, 000倍液、着果後にウララDF 2, 000倍液などを散布する。

エメロンでは、チェス顆粒水和剤 5, 000倍液、バリアード顆粒水和剤 4, 000倍液、ウララDF 2, 000倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア5月上旬現在、現地調査ほ場（ハウス栽培スイカ）において、ハダニ類の発生は認められていない。

イ向こう1か月の気象予報から、発生時期及び発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

スイカ、メロンともに、発生初期にバロックフロアブル 2, 000倍液を散布する。その後発生が見られた場合はマイトコーネフロアブル 1, 000倍液、ダニサラバフロアブル 1, 000倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤 1, 000倍液を散布する。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア5月上旬現在、現地生産芝ほ場での本病の発生量は平年並である。

イ本病は降雨によって発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア本病の発生前にセンチネル顆粒水和剤 2, 500倍液 0.25 L/m²、タフシーバフロアブル 1, 000倍液を 1 L/m²などを散布する。

イすでにパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤 500倍液 0.5 L/m²、バリダシン液剤 5の500倍液 0.5～1 L/m²などをスポット散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）などの参考情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第4号の発表は、6月4日（水）の予定です。